

受賞パンフレット



“往来”と“all right”

—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

第19回 オーライ!ニッポン大賞



主催：オーライ！ニッポン会議（都市と農山漁村の共生・対流推進会議）

協賛：一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構

後援：総務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省、
一般社団法人日本経済団体連合会、全国知事会、全国市長会、全国町村会

「オーライ！ニッポン」とは

都市と農山漁村の間の“人・もの・情報”の往来（おうらい）を盛んにすることで、日本全国が元気（All right）になることをめざす国民運動「都市と農山漁村の共生・対流」のキャンペーンネームです。

第19回 オーライ! ニッポン大賞 について

都市と農山漁村を相互に行き交うライフスタイルを広め、都市と農山漁村の双方が元気を取り戻すことをめざす国民運動について、その優れた取り組みを表彰する「オーライ!ニッポン大賞」も今回で第19回を実施することができました。

これもひとえに現場で活動されている皆様のご尽力と、関係7省をはじめ、関連団体及び地方自治体等関係者の皆様の温かいご理解とご支援の賜物であり、この場をお借りして心より感謝を申し上げます。

3年間に渡る新型コロナウイルス感染症の流行により、県をまたいでの移動自粛などにより、都市と農山漁村の人々による心のふれあいを伴う交流事業や農山漁村体験学習の機会の中止や延期等、困難な状況が続き、第19回の応募数は30件にとどまりました。

そのような厳しい時期のなかにおいても42年にもわたる交流活動を継続している団体や自然に触れたいという人間の根源的な欲求や心の交流による地域の活力を取り戻そうと、オンライン交流、マイクロツーリズムやワーケーション、サテライトオフィスといった新たな形が出てきています。

審査委員会の選考の結果、オーライ!ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件、オーライ!ニッポン大賞3件、審査委員長賞3件、ライフスタイル賞5件の計12件が決定しました。

グランプリに輝いた「特定非営利活動法人グリーンウッド自然体験教育センター」は、これまでに、審査委員長賞、大賞と着実に事業を発展させて受賞の階段を着実に一步一步と昇ってきました。山村地域の自然やその地域の人々が先生になるなど、多くの子どもの自立を促す教育は理想を現実化したものであり、その教育立村ともいえる取り組みは、過疎高齢化が進む全国の山村地域にとっても光明を見る思いです。そのほかにも、長年にわたり都市との連携により取り組みを継続しているもの、コロナ禍の課題に新たに着想した取り組みにより乗り越えようとするもの、人の移動に着目して、求められるものを提供することで円滑な移住定住を促進しているもの等、他の地域においても参考となる取り組みが多々あります。

個性的で魅力的なライフスタイルの実践者を表彰するライフスタイル賞では、農業と農家民宿の経営と半農半Xの取り組みや都市と農山漁村を行き来して、サラリーマンの副業として農山漁村を応援するライフスタイルを実践するなど生き方としてもコミュニティ・ビジネスの担い手としても大いに期待されます。

惜しくも受賞を逃された皆様の中にも魅力的な取組が数多くございました。今後、さらに充実した活動を継続されて再度のご応募いただきますよう、心からお待ちいたしております。

最後に受賞者の皆様をはじめ、関係するすべての皆様にこれまでの共生・対流に対するご尽力に感謝申し上げますとともに益々のご活躍とご発展を祈念いたしまして講評に代えさせていただきます。

令和5年7月13日

オーライ!ニッポン大賞

審査委員会

会長 安田 喜憲

オーライ! ニッポン大賞グランプリ

内閣総理大臣賞

1. 特定非営利活動法人

グリーンウッド自然体験教育センターしぜんたいけんきょういく (長野県 泰阜村)やすおかむら



【山村に希望の灯】

3～12泊程度の「信州こども山賊キャンプ」は、ひと夏で1,100人の小中学生と400人も青年ボランティアが集う“行列のできるキャンプ”となった。この時期、村の平均年齢を下げ、そして食材（野菜等）のほとんどを村の農家が提供する等、村に様々な波及効果をもたらしている。

この村に魅力を感じた子ども約20人が、1年間の山村留学：暮らしの学校「だいだらぼっち」にチャレンジして村の小中学校に通う。子どもの週末や放課後の体験活動を支える仕組みをはじめ、大学生や若者夫婦が自然や民家で学ぶ仕組み等、住民・NPO・行政・大学等が協働する年間を通した自主的な「学びの活動」が次々と組織化され始めている。

【村の自然資源を活かして経済の循環も】

このような自律への取り組みに刺激され、若者のU・ターンが増え青年団まで復活。山村留学の卒業生がU・ターンで村に定住する現象も始まり、限界集落が消滅に寄与したばかりか、村に一つの保育園に待機児童まで出るようになった。人口1,600人の村に2万人の「学びをとおした関係人口」が創出され、まさに「ヨソ者」が行う「教育」が地域再生の“ど真ん中”において、疲弊しきった山村に希望の灯がともった。

37年前に一人の女性が始めた小さな「山村留学」の歩み。「第4回オーライニッポン大賞審査委員長賞」「第16回オーライニッポン大賞」と着実に歩みを進めて、2023年の今、それはさらに大きなそして豊かなうねりになった。NPOグリーンウッドは村内最大規模の団体に成長し、「絶対無理だ」と言われていた自然環境を資本とした産業を成立させた。NPOの予算規模は約1億円。自主事業収入が8割を超え、NPOを経営的に自立させているばかりか、支出のうち実に7000万円が地域に還元されている。

【山村留学を契機に子どもがもどる、地に足がついた取り組み】

当団体はこれまでに審査委員長賞、大賞を受賞し、創始者がライフスタイル賞を受賞しているが、これまでの事業継続による成果と同時に、新たな事業展開による成果も挙げている。山村留学を体験した子どもたちが大人になって地域に移住してくるなど、幼少期の体験をきっかけとした田園回帰の流れを具現化、非常に先進的かつ地に足のついた取り組みであり、人口減少下でも幼少人口を一定数確保しつづけていることが高く評価された。



みんなで食事！



■連絡先 〒399-1801 長野県下伊那郡泰阜村6342番地2
NPO法人 グリーンウッド自然体験教育センター ☎ 0260-25-2851
<https://www.greenwood.or.jp>

オーライ! ニッポン大賞

2. 下川町産業活性化支援機構 (タウンプロモーション推進部) しもかわちょうさんぎょうかつせいかしえんきこう (北海道下川町すいしんぶ推進部)



タノシモカフェ

下川町

【移住に関わる全てに対応する窓口】

下川町が抱える高齢化・担い手不足・雇用の縮小などの地域課題を解決するため、移住者の誘致を行う組織を2016年に創設。町のPRやイベント・移住体験ツアーの開催のみならず、家探しのお手伝い、仕事の無料紹介・起業家の育成などを含めた移住に関わるほぼすべての事柄を広く丁寧に引き受けるワンストップ対応窓口である。

また、移住後のフォローとして、寛容な町民性を活かした町民交流会「タノシモカフェ」(参加者は地元民・移住者他)も月1回のペースで6年継続開催している。

当団体を通して移住した方は7年で約150人、これは下川町の人口の5%にあたり、移住者や関係人口の拡大に大きく寄与している。

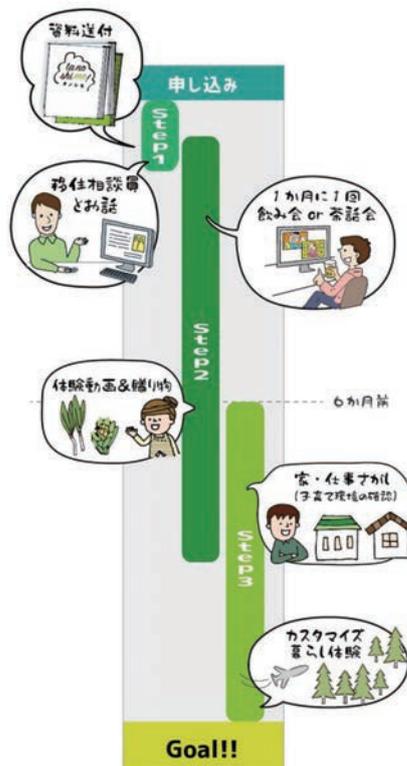
【1年後移住するぞ! プロジェクト】

往來が難しい現状を加味し1~2年後の移住をイメージするための、移住準備プロジェクト。

まずは移住までのステップを可視化したガントチャートを見ながら、移住に対する不安や移住後のありたい暮らしの形などをZOOMなどのオンラインミーティングツールを利用してヒアリングしていく。移住のタイミングによっては、そこから準備の伴走を開始する、また、1年後移住プロジェクトに加入するメンバーを“移住同期”と定義し、彼ら“移住同期”同士や先輩移住者との交流が図れるようなオンラインイベントも定期的で開催している。

【他地域の参考となる実効性を高める数々の工夫】

移住者誘致は全国各地で行われている中、「1年後移住するぞ! プロジェクト」として1~2年後の移住を想定した準備をするというコンセプトは、ユニーク。コロナ禍で現地の往來がなかなか叶わない中での工夫があり、移住予定者から見ても安心感につながっている。また、移住予定者の「移住同期」として横のつながりで連携を取り合うという取り組みも、移住誘致をより実効あるものにしており、他地域での応用可能な取り組みと高く評価された。



タウンプロモーション推進部



つながりLab懇親会



会報誌
B面シモカワ カレンダー

■連絡先 〒098-1203 北海道上川郡下川町共栄町1番地1
下川町産業活性化支援機構 ☎ 01655-4-3511
<https://shimokawa-life.info/>

3. 特定非営利活動法人

とおのやま さとくら
遠野山・里・暮らしネットワーク (岩手県 遠野市)



参加者と事務局の集合写真

【グリーン・ツーリズムの実践は、遠野に住むことを誇りに思い、それが生業にもなる】

遠野のグリーン・ツーリズム（旅行者が、農作業体験以外にも地域の暮らしや各種体験を体感し、地域を活性化させる交流事業と位置づけ）は、1995年に遠野グリーン・ツーリズム研究会が発足し、グリーン・ツーリズムを官民協働かつ草の根型活動で推進する団体（事務局機能）として2003年度に特定非営利活動法人遠野山・里・暮らしネットワーク（略称：遠野山里ネット）が設立した。

「地域住民が、グリーン・ツーリズムの実践により、遠野に住むことを誇りに思い、それが生業にもなる。」ことを通して、社会全体の利益の増進に寄与することを目的に、グリーン・ツーリズムによる地域づくりの中間支援組織として、現在スタッフ8名体制で事業を継続・展開している。

リズムによる地域づくりの中間支援組織として、現在スタッフ8名体制で事業を継続・展開している。

【地域づくりの中間支援を担う新たな“遠野物語”】

2019年度の遠野グリーン・ツーリズムは年間9,000泊を超え、2005年度と比較し3.2倍に成長している。2004年からはじまった地元企業である遠野ドライビングスクールと連携した遠野体感型グリーン・ツーリズム自動車合宿は、2021年度は約8,000人、合宿生580人が市内の宿泊所に14泊程となり、そのコーディネーターを担っている。

他地域には珍しい民間団体によるツーリズムによる地域づくりの中間支援を行っていることが特徴である。2019年度には、遠野の暮らしぶりを旅のコンテンツとして販売するワンストップ窓口・販売所「遠野旅の産地直売所」を遠野駅前開設。地域の「ありのままの日常が体感できる旅」の総合コンシェルジュ機能を整備。

また、コロナ禍でもマイクロツーリズムやアクティメニューの拡充、関係機関と協力した新企画を販売する等グリーン・ツーリズムを軸にした様々な取り組みを展開し、発展的に継続している。



農家民宿の交流シーン

【コロナ禍に花開いたマイクロツーリズム】

コロナ禍で従来のグリーン・ツーリズムが大きな打撃を受ける中で「コロナ禍だけでできる」「コロナ禍だからできる」という逆転の発想でチャレンジした。特に「超マイクロツーリズム」は、関係人口づくりで自ずと域外へ目が向く中、市内の地元住民を対象としたツーリズムを実践し、多数の市民が参加したことは、コロナ後のツーリズムを直接間接支える地域の土台を築くことにつながると高く評価された。



遠野の春の里山の風景



縁側での交流



収穫体験



里山サイクリング

■連絡先

〒028-0514 岩手県遠野市遠野町28番地5

NPO法人 遠野山・里・暮らしネットワーク ☎ 0198-62-0601

<http://www.tonotv.com/members/yamasatonet/>

オーライ! ニッポン大賞

4. 一般社団法人 ^{ひがし そのぎ}東彼杵ひとこともの公社 ^{こう しゃ}(長崎県 ^{ひがし そのぎ ちょう}東彼杵町)



【空き倉庫活動から人が集まる仕組み仕掛けづくりで蘇る地域】

東彼杵町は、お茶とみかんとくじらの町、長崎県の玄関口として知られ、県内で2番目(7,698人)に人口が少ない町。東彼杵ひとこともの公社は、廃倉庫を改装した交流拠点を整備し、周辺エリアでの新規開業を支援しつつ50人以上の移住者を呼び込んでいる。

2015年、取り壊し寸前だった築70年以上の旧千綿第三農協米倉庫をリノベーションし、地域交流拠点となる「Sorriso riso (ソリッソリッ) 千綿第三瀬戸米倉庫」としてオープン。拠点の企画として5年で5店舗をこの千綿地区に派生させ

る企画「パッチワークプロジェクト(寄せ集め出店)」の仕組みを仕掛け、千綿食堂や海月食堂、ちわたや、LittleLeoなど5年で20店舗がこの千綿地区に出店・起業(20店舗の内、15店舗を創業サポート)、東彼杵町の旅行訪問の目的地化や九州電力と連携して東彼杵町の交流移住人口の拡大、関係人口創出を進め、地域活性化の起爆剤となっている。

【目指すは、人が集まり、集まりたくなる「地域ブランドの創出」】

地域ブランドとは、単に特産品や観光地の開発だけを意味するのではなく、今ある地域資源を体験価値に転換し、「買いたい」「訪れたい」「交流したい」「住みたい」と思われる視点づくりと、地域への愛着や誇りをもつ人々を増やし、有機的に人が「集まる」仕組みが大事であり、「地域そのもののブランド化」を目指して、新たに「くじらの髭」、「CHANOKO(チャノコ)」(九州電力協業ブランド)の二つの地域ブランドを創出した。

【わくわくするような仕掛け満載、軽快なフットワークが自慢】

目立った観光資源等がない地域においても、知恵とユーモアで動きを生み出せるという好事例。一つひとつの活動のネーミングに頓智が散りばめられていたり、何かやりたいという人の気持ちを引き出しながら応援する「パッチワーク」の考え方など、町民をはじめ関わった人がワクワクするような仕掛けが満載の取組や短期間で拠点の開発や起業の支援を実現するなど、軽快なフットワーク・スピード感も大きな魅力と高く評価された。



■連絡先 〒859-3923 長崎県東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷1303番地1
(一社)東彼杵ひとこともの公社 ☎ 0957-20-1883
<https://kujiranohige.com/about>

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

5. 特定非営利活動法人 ^{あすか みらい つく かい} 明日香の未来を創る会 (奈良県 ^{あすか むら} 明日香村)



明日香村

【都市住民との協働で守る棚田オーナー制度】

明日香村稲渕は、観光客で賑わう石舞台古墳から県道15号を2kmほど南下した所にあり、集落には大和川水系の「飛鳥川」が流れ、その河岸段丘の斜面に棚田とこれを維持してきた農家、非農家あわせて60戸ほどが暮らしている。稲渕棚田の起源は15世紀に遡るとされ、数百年にわたって代々稲作が続けられている。四季の移ろいととも独特の美しさを見せる棚田の農村風景は、見る人の郷愁を誘い「日本の原風景」とも呼ばれてきた。都市住民との協働で棚田を守る棚田オーナー制度や農作業体験プログラムを用意し提供。

田植えや稲刈り、野菜の収穫、山菜狩りなどの農業体験、そば打ち、わらじ作りや竹細工などの手作り体験、そして楽しい餅つき体験などの他に棚田の自然観察も用意している。

【棚田保存の教科書的な取り組みの歴史】

1995年、明日香村稲渕の棚田に広がりつつあった耕作放棄地対策として、21haの棚田を保全する目的で、地元住民で組織した「棚田ルネッサンス実行委員会」を設立。同年から棚田オーナー制度を導入して、都市住民と協働で棚田を保全してきた。1997年には、農道を案山子ロードと呼び、1998年は田んぼ54区、畑51区と導入時の3倍にオーナー数が増加。1999年は炭焼窯を復活させ炭焼をはじめた。2000年は、棚田オーナーの宿泊施設「稲渕棚田憩いの館」が完成。

2003年には、田んぼ80区画、畑100区画に増加。2006年には、アストラゼネカ(株)による草刈りボランティアがはじまり、2011年に、特定非営利活動法人として改組しスタート。2011年はアストラゼネカ(株)に変わり、(株)新生銀行による草刈りボランティアがはじまる。2017年は、シニアや農業をはじめたい女性向けのビギナーズコースをはじめた。

【子供も楽しめる各種イベント企画で後世に伝える】

度重なるイノシシ被害など困難のなかにあって、案山子コンテストや地域の子供たち対象の田植え・稲刈り体験など、取り組みを継続し農業遺産としても価値のある棚田の保全し後世に伝えていく活動を27年間継続している点が高く評価された。



■ 連絡先 〒634-0123 奈良県高市郡明日香村稲渕593番地1 (稲渕棚田憩いの館内)
NPO法人 明日香の未来を創る会 E-mail: asukamirai@gmail.com
<https://www.asukamirai.org>

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

6. 有田川町 × 龍谷大学

ありだかわちょう
(和歌山県 有田川町)

【地域特産を活用した大学と行政のコラボは商品化から販促へと展開】

有田川町はぶどう山椒発祥地であり、和歌山県は山椒の生産量日本一だが生産者の高齢化が激しく、既存ルートに出荷しているだけでは苦しく、後継者不足も深刻で5年先に産地が消滅する可能性が高いと言われている。これらに危機感を抱き、有田川町と龍谷大学が中心となり、2019年からぶどう山椒農家、地域住民、企業等と連携しながら、多面的に産地振興を実施。

龍谷大学との包括連携協定締結では、「ぶどう山椒の発祥地を未来へつなぐプロジェクト」を発足。同大学経営学部藤岡ゼミと主として連携し、学生がフィールドワークを行い、ぶどう山椒の市場調査や産地の認知度向上、商品開発やプロモーションを行っており、ぶどう山椒オフィシャルサイトも開設。都市部の企業から連絡があり、商品開発・販売に至った例が多数。さらに若手農家に火がつき、自社商品の開発による6次産業化や輸出商社との商談等販路拡大が盛んになった。ミシュラン3つ星の料亭にも採用される等、ぶどう山椒を主として生計を立てるモデルとなる経営スタイルが確立しつつあり、県や町と連携して移住・就農インターンシップにも取り組み、県外からの移住就農者も誕生している。



大学開発商品カラー



ぶどう山椒

【山椒+X(プラスエックス)の営農スタイルの提案による移住推進】

ぶどう山椒農家は大多数が山椒と年金を組み合わせる生計を立てており、既存ルートに出荷しているだけでは、食べていけない。また、高齢化した農家が次々と引退する一方で、食べていけない現実からそれをナリワイにしようとする新規就農者がおらず、産地消滅の危機が迫っていた。ぶどう山椒農家は5～6月に実山椒の収穫、7～8月に粉末状に加工する乾燥山椒の収穫と繁忙期があるが、1年の半分以上は閑散期。この閑散期に別の仕事を見出し、山椒農家としての生活を組み立てられるよう、林業や他の産物の栽培など「+X」

を組み合わせた営農スタイルを提案し、PRを行っている。その結果、山椒+林業のスタイルで営農を目指す移住者も現れている。

【商品化により移住就農者や地域農林業にも効果】

生産者と大学生のつながりを商品化まで昇華させた点や春夏秋冬にわたる活動(生計)への意欲的な試み、若手農家が複数のナリワイを持ちながら身をたてながら持続可能な農業に取り組むというスタイルを体現し、移住就農者につなげている点が高く評価された。



関係人口づくりtoi story



就農インターンシップ(若手農家)



農家・企業・大学・町交流会

■連絡先 〒643-0153 和歌山県有田郡有田川町中井原136番地2

有田川町商工観光課 ☎ 0737-22-4506

<https://www.town.aridagawa.lg.jp/top/kakuka/kanaya/9/budosansyo/3413.html>

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

7. 農事組合法人 なんぶせいさんくみあい ながさき南部生産組合 (長崎県 みなみしまばらし 南島原市)



とうもろこし狩り

農事組合法人ながさき南部生産組合は、1975年、東京青果(株)勤務を経て帰郷した近藤会長理事が、有機農法の研究の場として立ち上げた南部野菜生産組合と南高果樹研究会の2組織が前身。

当時は有機農業や産直が珍しかったため、集まった生産者は、南部野菜生産組合が5人、南高果樹研究会が7人の計12人。栽培方法の研究と同時に、近藤会長理事は販路を求めて有機農産物への関心の高い生協やスーパーに通い続けた。初めての提携先は、中堅スーパーのマルエツ、間もなくコープ鹿児島等との提携も始まり、1985年には上記2組織を統合し「ながさき南部生産組合」に改組した。

その後、1991年には組合を法人化し、現在の組合員は

南島原市、雲仙市、島原市と島原半島全体で142人、年間事業高は約22億円で事業高の7割は生協等の産消提供による取り引き。

栽培基準の策定・厳格化に着手。(1)有機栽培(2)農薬不使用栽培(3)農薬を5割以上削減(現・特別栽培)する慣行農法の3段階に分類する品質管理体制を構築し、さらに、残留農薬検査結果の公開や、消費者が直接現地を訪れて圃場を確認する等、提携先との信頼関係強化に力を入れ、これらの取り組みは、消費者が現地を訪れる農家民泊や直売所「大地のめぐみ」(以下、直売所)開設、さらに食に関心が高い消費者との交流事業、長崎県島原半島への移住・定住等につながっている。

【農業の先進地は、空き家解消にも大きく貢献】

「消費者から支持される生産方法」を守り、信頼を得て47年。諫早市の住宅街に2005年開設した直売所では、スイートコーン収穫体験等を企画・実施し、若い客層をつかんでいる。2018年からは長崎市内のレストランやこども食堂への食材提供を開始。Uターン就農希望者に対する取り組みにも力を入れており、研修施設や宿舍等環境を整備し、受け入れ農家の協力を得て、環境・自然に配慮した実践的な農業研修を通した「プロ農家育成研修プログラム」という就業支援活動と研修終了後の独立・販売支援も実施。結果、研修生から直売所販売農家も生まれている。南島原市内も空き家が目立つ、ながさき南部生産組合員は「空き家バンクに」先駆けて組合員が空き家を購入し、自家の空き家を活用して移住者に低額家賃で貸し出すなどの取り組みを実施(4軒)、負の財産になりそうな空き家の減少や移住者の定住にも貢献している。

【農政の重要政策を先んじる農家の力】

2008年に設立された南島原市ひまわり観光協会の農家民泊に農業体験受け入れ家庭として働きかけ、約170件の受け入れ家庭の登録につながった。1975年、有機農法研究並びに有機農産物産直に取り組む二つの任意組織からスターとし、生協産直を全国的に拡げ、年間事業高は約22億円(生協等の産消提携の取引が7割)へと発展し、その取り組みは、今日、重要な農政課題の柱となった「みどり戦略」の取り組みをいわば先取りしてきた。農家の方々の自信を取り戻して自主自立の形を構築し、地域の雇用も創出するという体系的な仕組み作りは他地域への応用や波及が見込める。また、地元高校生との協業やインターンシップ、修学旅行の受け入れなど未来につながる若者へ取り組みも高く評価された。



オンライン交流会



かかしコンテスト



ユーコープ新人研修イチゴ畑



消費者からお手紙を生産者受取り

■連絡先

〒859-2305 長崎県南島原市北有馬町戊2465番地1

農事組合法人 ながさき南部生産組合 ☎ 0957-65-7008

<https://www.tentoumusi.net>

8. 瀬崎 真広さん

(東京都 江戸川区)



農家民宿



一緒にやるぞー!の絵

【旅行した農山漁村の魅力と危機感を知り、会社員のポテンシャルと結び付ける】

都内の金融機関に勤務(37歳)。6年前に石川県奥能登の農家民宿群「春蘭の里」に旅行した際、人の温かさや、キノコやブリ等の料理、白壁の伝統建築等、里山里海の文化に魅了されるが、人口減により、地域が消滅危機にあることを知る。

そこで、後世に残すべき地域の文化資源と、自分のような都内勤務の会社員が持つポテンシャルを結び付けた持続可能な地方創生モデルの確立を視野に定期訪問し、多様な人で賑わう地域づくりへ支援を開始した。

その結果、本業外で運営するNPO法人が持つ都市部ネットワークを活用し、集客・資金・運営支援等を行い、支援者も拡大している。

【本業を有する若手サラリーマンのプロボノ】

NPO法人ZESDA(本業を有する若手サラリーマンが個人資格で集まるプロボノ団体)の理事であり、「春蘭の里」の支援リーダーを務めている。ZESDAは、銀行・メーカー・コンサルタント会社の社員や、会計検査院・農林水産省・市役所勤務の公務員、弁護士、公認会計士等、100名程度で構成されている。

【能登の農家民宿「春蘭の里」を支援】

具体的な支援内容は、都内企業を能登町役場に繋いで学生向けフィールドワークプログラムを町長を巻き込み実施したり、石川県庁からの発注で農家民宿の情報を東京目線で外国人向けに整理する業務を受託し「英語ホームページの作成と、リモート英語対応支援(英語HPを新設。全49軒の農家民宿オーナー)」「平均70代」に代わり、都内勤務の英語堪能なサラリーマン達が空き時間にメールや電話対応をサポートや石川県庁と協力し海外にHPも宣伝)したりと、それまでなかった外国人の直接予約中心に年100人以上の新規集客を導いた。

【副業で地域おこし、やりがいを求める若者のモデルに】

本業を有する若手サラリーマンが、都内で蓄積したコネ・チエを地方に注ぐ。地域の活性化と、都内サラリーマンの平行キャリア形成を両立させた。副業を解禁する企業も増える中、本業以外にもやりがいを求める人たちにとっても参考になる取り組みと高く評価された。



外国人客のアテンド



体験プラン開発時



町長らとの登壇

■連絡先 Facebookのユーザーネーム Masahiro Sezaki
<https://www.facebook.com/masahiro.sezaki.3/>

9. ^{うしだ みつのり}牛田 光則さん

(新潟県 ^{じょうえつし}上越市)



【うしだ屋】家族写真



【うしだ屋】旭商店メンバー

【米どころでコメ農家と農家民宿の半農半X】

農業研修を終了後、2017年の春に「コメ農家+農家民宿うしだ屋」として事業を開始。田んぼや機械を地域の方々から借り受けて、師に倣いアイガモ農法（一部は低農薬栽培）での米作りをスタート。同年秋には、自宅として利用していた元空き家の古民家をリノベーションし定員6人の農家民宿もオープン。

田麦集落は首都圏の小・中学生を受け入れる「越後田舎体験」という都市農村交流が二十年以上つづいてきたが、いわゆる一般的な観光地ではない。そのような中でも、宿開業以来、延べ泊数にして800泊を超える新たなお客様に集落や地域の紹介している。また、地元集落内の同年代農業後継者らと経営や営農技術のノウハウ共有・地域ブランド作りを目的とする会社の設立を呼びかけ、2022年8月「合同会社 旭商店」を共同で立ち上げた。

【農業の面白さや豊かな農山村文化に魅了され、多くの人に知ってもらいたい！】

棚田の風景と、冬は背丈を超える豪雪で知られる新潟県の旧東頸城郡。現在は上越市と十日町市に分かれているが、暮らす大島区（旧大島村）の田麦集落は上越・十日町・そして柏崎との市境にも接する、まさに広範な丘陵地帯の真ん中に位置している。地縁も血縁もない自分たち夫婦がこの土地に1ターン移住をしたのは、学生時代から農家になりたかった妻が、この近くのアイガモ農法稲作農家さんで農業研修がきっかけ。宿泊業やアウトドア業で働いていた自分も、すぐに農業の面白さや当地域の豊かな農山村文化に魅了され、自分の想い描く宿をベースにこの魅力をより多くの人に知ってもらいたい！と、稲作農家と農家民宿の“二足草鞋”での独立を決意した。

【稼げる農家を目指し地域を盛り上げている】

米農家への新規就農という高いハードルを乗り越え、農家民宿による複合経営を行い、半農半Xの実践で地に足のついた生活をしているが、それだけでなく若手農家を取りまとめ、合同会社を設立するなど稼げる農業を目指し、地域全体を盛り上げる取り組みを行っている点を高く評価された。



【うしだ屋】外観。



【うしだ屋】田植え体験



【うしだ屋】自然体験

■連絡先 〒942-1102 新潟県上越市大島区田麦 1283番地
☎ 050-1001-1131
<https://ushidaya.com>

10. ^{さんべ} ^{ひろみ} 三瓶 裕美さん

(島根県 ^{うなんし} 雲南市)



【地域おこし協力隊からスタートし後進の良き相談役に】

地域おこし協力隊の任期後、雲南市の「空き家付き農地取得制度」を利用して、空き家と農地を一緒に購入。東京から移住して12年、「体と食と農のつながるスペース」【つちのと舎】を夫婦で経営し、自然農や民泊、カフェ、ボディケアを行う。

その他、地域自主組織「日登の郷」で広報紙の編集担当、雲南市の小中学校の体育活動コーディネーターとしてダンスや表現運動の講師、雲南圏域（雲南市、奥出雲町、飯南町）では「FMいずも」のラジオパーソナリティー「ルーラル雲南」という番組制作（2015年10月～2022年12月）、

島根県では一般社団法人しまね協力隊ネットワークの代表、全国規模では地域おこし協力隊サポートデスク専門相談員も担っている。令和5年度からは、雲南市地域おこし協力隊マネージャーに着任。



田植え集合

【根をもつことと翼をもつこと】

地域おこし協力隊として、市内でも課題が先行する地域を担当し、国の制度であり、地域にじっくりと寄り添う活動をすることから、地域づくりを俯瞰的に見ることを知り、今のライフスタイルに大いに影響している。なかでも田んぼの活動を大事にしている。自給自足を目的に始め、更に高齢化により耕作放棄地にされた自分たちの隣の田んぼ3反も耕作するために、関心ある友人に声をかけて「日登自然農田んぼ団」を結成した。イベント形式や手伝い、インターンシップの受け入れなどにより、4反近くを手植え・手刈り・

はで干しで米作りしている。田んぼを通じて、地域の中の大切なものを、それぞれが好む方法で大切にしながらを育てていきたい。

【地域に溶け込み頼られながら活動を広げて】

多業の傍ら、地域おこし協力隊としての自らの経験を次の移住者や協力隊に伝えるための、サポートデスクでの支援や県の協力隊ネットワークづくりを行うなど、地域に溶け込み頼られながら新たな人材の取り込みと定住サポートを積極的に行っている点を高く評価された。



活動発表会 集合写真



三瓶夫妻

■連絡先 〒699-1322 島根県雲南市木次町寺領1019番地22
E-mail:hilo.akua@gmail.com
<https://tsuchinotoya.space>

11. くにた しょうへい 国田 将平さん

(広島県 広島市)



鍼灸施術風景



登山企画の際の写真

【鍼灸院、民泊、二地域居住、自然体験指導者の4役】

広島港からフェリーで約20分のところにある広島市南区の似島（にのしま）へ2018年4月に単身移住し、7月から鍼灸院を開業した。その後、民泊「くにへいハウス」や自然体験をテーマに活動する「にのしま自然体験活動クラブ」を来島者向けに運営、実施を行なっている。基本、平日は似島、週末は広島市内近郊に住んでいる家族のもとへ往来。

広島市内と近い距離ある似島は、都市部とは対照的に山と海の自然が豊富。その立地を活かして、登山やサイクリング、牡蠣打ち工場の見学、昆虫食（セミの採取と試食）などを開催。キャンプ場の運営・管理も行っている。また、自然体験活動上級者指導者の資格を取得し、自然体験学習や放課後児童クラブの自然体験プログラムとして似島に来島して頂いている。

【人の役に立ちたいという思いから目指した鍼灸師の道】

人の役に立ちたいという思いから鍼灸師になった。整形外科に勤めて、充実した日々を過ごしていたが、人として役に立てる場所がもっとあるのではないかという思いが強くなり、医療サービスの受けにくい地域を探そうになっていた。サイクリングへ来た似島は、信号はなく自然豊かで、対岸の広島市内とは全く違う時間の流れ方に魅了された。似島で鍼灸院を開業して役に立てる事ができれば最高だなという思いが強くなり、休みの度に足を運び、島民に話しかけたり島での生活を聞いてみたり、少しずつ島民との関係性を築いていき、鍼灸院を開業のための空き家を借りられることになり、家族と相談して、単身で似島へ渡り鍼灸院を開業した。

【自分のためにも地域の人のためにも活躍が幸せを呼ぶ】

鍼灸師の専門技術を活かして、離島において鍼灸ができる唯一の存在として活躍の場を見つけており、とかく専門職が不足する条件不利地域における専門職の幸福なあり方のロールモデルと言えるほど高く評価された。



島外の企業と一緒にいったボランティア清掃で、私が参加者の前で話している画像



島内にある水産会社の牡蠣工場の見学の写真



子ども対象の自然体験企画の写真

■連絡先 〒734-0017 広島県広島市南区似島町字家下752番地67
E-mail: info@kunihei.com
https://kunihei.com

12. ^{やまなか} ^{ゆか} 山中 裕加さん

(愛媛県 ^{さいじょうし} 西条市)



【都市で学んだ「まちづくり」を郷里で実践】

松山市出身。都内の大学で建築学を専攻。大学院で都市史・都市論、国際都市開発/再生を学んだ後、(株)スピークにて建築デザインや不動産企画・施設運営管理等の業務に従事。在籍中に担当した地方自治体との移住促進事業の経験から地方での「まちづくり」に興味を持ち、2018年に個人事業主開業後、都内でディベロッパー向けの不動産活用の企画業務を軸に事業を行う一方、全国を無拠点居住で放浪。2019年5月より愛媛県西条市のローカルベンチャー誘致・育成事業への参加をきっかけに同市へ拠点を移し、商品開発や場所づくりを通してまちと人をつなぐための事業を展開。「メンマチョ Project」は、放置竹林という地域課題を身近に感じてもらうため、商品開発販売を行い、地域内での収穫イベント(ワークショップ)開催やイベント出店を通して、課題に目を向けるきっかけづくりと竹林整備の一環として「メンマの原材料の収穫」を継続的に行う人材の育成を目的としている。

課題に目を向けるきっかけづくりと竹林整備の一環として「メンマの原材料の収穫」を継続的に行う人材の育成を目的としている。

【「まち」をかたちづくる一人一人のアクション】

「まちは誰か(第三者)がつくるものではなく、関わる人々の行動の積み上げ(アクションの総数)がそのまちをかたちづくっている」という学生時代に専攻していた都市論の考え方を土台に、自分たちの地域に山積する「課題」に対していかにアクションをする人を増やすかということに常に興味を持って活動してきた。「人工林」や「竹林」「棚田」の中で、祖父母の裏山にある竹林が放置されていること、また、移住後毎月参加している竹林整備団体との縁もあり、自分にとってより身近な課題として取り組める「放置竹林問題」に焦点をあて、自分にできるアクションの体現として、竹林を活用した商品「メンマチョ」の企画・開発に挑戦している。

【全国的な課題に取り組む優れた推進力】

放置竹林は、全国的な課題であり、メンマへの活用は面白い。新たなニッチを探り当てれば、地域経済にも反映する若い人たちを巻き込みながら、収穫体験を行うことで、竹林整備につながる活動を企画・実行した推進力は素晴らしいと高く評価された。

全国へ広がるメンマチョプロジェクト



全国へ楽しく・おいしく展開していたら、
いつの間にかローカルが盛り上がり、
自然環境にも良いことをしていた...という展開に。

メンマチョは、放置竹林のあるところに突如現れる、
メンマのちからでローカルを盛り上げるニューヒーロー。

あくまで世界観として大切にしたいのは、
プロレスのモチーフで演出しているように
エンターテインメントであるところ。

まじめに地域課題や環境問題に取り組むのではなく、
楽しく・おいしくメンマを食べていたら、
結果としてローカルや自然環境に良いことをしていた...という
展開をめざします。



■連絡先 〒793-0030 愛媛県西条市大町 265番地1 パーラー〇〇
E-mail: yamanaka@hinel-with.me
https://menmacho.jp

第19回オーライ！ニッポン大賞の概要

趣 旨

都市と農山漁村の共生・対流に関する活動を行いながら、交流の拡大や地域活性化に寄与した団体・個人、及び都市と農山漁村双方の生活や文化を楽しむライフスタイルを実践している個人を表彰し、その活動を広くPRすることで農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの普及推進を図ることを目的としています。

表彰対象・審査基準

オーライ！ニッポン大賞

「都市側から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」等を通じて、都市と農山漁村の共生・対流の拡大に寄与した実績や効果の高い団体又は個人。

(1) 募集の対象

- ・学生若者カツヤク都市のチカラ部門…主に30代までの若者の活躍や都市側からの働きかけにより推進されている活動
- ・交流イノベーション部門……………新型コロナウイルス禍により、新たにはじめられた農山漁村支援の取り組み
- ・元気な農山漁村部門……………主に農山漁村側からの働きかけによって推進されている活動

(2) 表彰の種類

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件
オーライ！ニッポン大賞 3件程度
審査委員長賞 3件程度

(3) 審査の基準

新規性	農山漁村地域を舞台に新ライフスタイルの提案、普及の取り組みやコロナ禍での工夫したこと。
独自性	地域固有の資源や個性を活かした、オリジナリティ豊かな取組みであること。
持続性	法人化や収益向上等により、持続性の高い取組みであること。
モデル性	他地域への応用や波及が期待できるモデル性の高い取組みであること。
効果性	農山漁村地域を活性化する効果があり、今後も効果が持続して発現すると見込まれること。
社会性	地域の内外の多様な主体が参加連携し、地域の課題解決に取り組んでいること。

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

都市部から移住したUJターン者もしくは都市と農山漁村を行き来する二地域居住者等のうち、農山漁村地域において共生・対流の活動に取り組みながら、魅力的なライフスタイルを実践している個人。

(1) 表彰の種類

ライフスタイル賞 5件程度

(2) 審査の基準

新規性	農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの実践やコロナ禍での工夫したもの。
独自性	個性的で魅力のある活動であること。
継続性	新たなライフスタイルの実践に継続性があること。
モデル性	新たなライフスタイルが他の人の参考となるものであること。

第19回オーライ！ニッポン大賞審査委員会の構成

会長	安田 喜憲	国際日本文化研究センター 名誉教授（オーライ！ニッポン会議副代表）
	井上 和衛	明治大学 名誉教授
	岡島 成行	公益社団法人日本環境教育フォーラム 会長
	嵩 和雄	國學院大學 観光まちづくり学部 准教授
	嵯峨 生馬	特定非営利活動法人 サービスグラント 代表
	志村 格	一般社団法人 日本旅行業協会 理事長
	長岡 杏子	(株)TBSホールディングス事業投資戦略局 ライフスタイル事業戦略部長
	馬場 未織	NPO 法人 南房総リパブリック 理事長
	平野 啓子	語り部、かたりすと、大阪芸術大学放送学科教授（オーライ！ニッポン会議副代表）



第19回オーライ!ニッポン大賞 受賞者一覧

オーライ!ニッポン大賞グランプリ

① 長野県 泰阜村

特定非営利活動法人
グリーンウッド自然体験教育センター

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

⑧ 東京都 江戸川区

瀬崎 真広 さん

⑨ 新潟県 上越市

牛田 光則 さん

⑩ 島根県 雲南市

三瓶 裕美 さん

⑪ 広島県 広島市

國田 将平 さん

⑫ 愛媛県 西条市

山中 裕加 さん

オーライ!ニッポン大賞

② 北海道 下川町

下川町産業活性化支援機構
(タウンプロモーション推進部)

③ 岩手県 遠野市

特定非営利活動法人
遠野山・里・暮らしネットワーク

④ 長崎県 東彼杵町

一般社団法人
東彼杵ひとことの公社

オーライ!ニッポン大賞審査委員長賞

⑤ 奈良県 明日香村

特定非営利活動法人
明日香の未来を創る会

⑥ 和歌山県 有田川町

有田川町 × 龍谷大学

⑦ 長崎県 南島原市

農事組合法人
ながさき南部生産組合



オーライ!ニッポン会議 事務局

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町45番地 神田金子ビル5階

TEL 03-4335-1985 FAX 03-5256-5211 ホームページ <https://www.kouryu.or.jp/service/ohrai.html>

「オーライ!ニッポン会議」の事務局を構成する20団体

- | | | | |
|------------------|-------------------------|----------------------|----------------|
| (公社)全日本郷土芸能協会 | (一財)日本青年館 | (公財)日本修学旅行協会 | (公財)全国修学旅行研究協会 |
| (公社)日本観光振興協会 | (公社)日本青年会議所 | 日本商工会議所 | 全国商工会連合会 |
| (一財)伝統的工芸品産業振興協会 | (一財)地域開発研究所 | (公財)日本離島センター | (公財)都市計画協会 |
| (一財)地域活性化センター | (公財)育てる会 | (公財)パブリックヘルスリサーチセンター | |
| (公社)日本環境教育フォーラム | 全国水土里ネット(全国土地改良事業団体連合会) | 全国森林組合連合会 | |
| (一財)漁港漁場漁村総合研究所 | (一財)都市農山漁村交流活性化機構 | | |